

幼児の言語獲得に関する一考察

—ブルーナーの言語獲得論を中心に—

今井 康晴
(2011年2月10日受理)

A study on children's language acquisition: -Focusing on Bruner's language acquisition-

Yasuharu IMAI

This paper's purpose is discussed in Bruner's language acquisition. Bruner was not only understood the language partially of the thinking and development but also was grasped as a tool of the mind and a tool of the thinking. When the child acquired the language, he emphasized it as a tool that defined the meaning and the world to the entry of the culture. The method was achieved at the time of interaction between the mothers and children, when the young child acquires language, it was not to wait for advancement, insisted that it is hastened by environment. Thereupon, the structure in the acquisition of the language of Bruner in these some points was outlined, and the process of the language acquisition in relations between the interaction with mother and child and others was clarified.

Key words: Bruner, language, language acquisition, scaffolding, format,

キーワード: ブルーナー, 言語, 言語獲得, 足場かけ, フォーマット

はじめに

人間と他の動物との違いを示す特徴として「言語の使用」が挙げられる。言語獲得は主に乳児期から幼児期にかけて達成されるため、乳幼児期から幼児期は最も人間的に成長する時期であると位置づけられる。従来、言語獲得は、環境説と生得説によって論究されてきた。環境説は、特別な訓練や教育を受けなくとも、言語を自然に習得するという概念に基づくため、出生後の環境が強く影響し、環境（社会、文化、人間）の模倣により言語が獲得されるという模倣説を強調した。生得説は、幼児の言語発達には一定の法則と順序が存在し、その基礎にある認知発達段階に基づき特別に障害のない限り、幼児に共通する過程として言語獲得を強調した。（中島、1999）

環境説、生得説など、それぞれの言語獲得に対するアプローチの違いはあるが、基本的語彙や文法に関しては無意識的学習であり、重篤な障害をもたないかぎり、「言語を学ばない」という選択はなく、人間が生きていける環境であれば成し遂げられる。つまり、幼児の言語獲得は、自然発生的であるのと同時に、子

もの内部の発達と環境との双方向の関わりによって育まれる。故に、言語獲得に関する研究は、主に発達や認知との関連において論じられてきた。また言語は単なるコミュニケーションツールとしての役割だけでなく、文化の譲渡、言語による思考の発達など、人間としての育ちを保障する認知発達においても重要な要因である。

幼児の言語獲得について、ブルーナー（Jerome Bruner）は、言語を単に思考や発達の一部として捉えるのではなく、心の道具、思考の道具としての作用、文化の参入への方法、世界を意味づけするツールとして様々な側面を強調した。その方法は、母子間における相互作用において達成され、幼児が言語を獲得する際に、発達を待つのではなく他者や環境によって早められることを主張するのであった。本研究では、ブルーナーにおける言語獲得について考察した。その要点は、ブルーナーの言語獲得における構造を概説し、母子との相互作用や遊びや読み聞かせなどにおける言語獲得の過程について明らかにした。

1. ブルーナーの発達論における言語の位置づけ

幼児の言語発達の在り方は、岡本夏木によると「幼児の言語発達は、心の中の表象作用と一体化している¹」と位置付けられている。表象作用とは、事物や事象について、心の中で描き、また心の中で様々に働きかけることができる機能で、その場に直接対象となるものが現前していなくても、心の中でその対象を描き、それについて考え、それを扱うことのできる働きである²。ブルーナーは、まず自らの認知発達論を基に、表象作用と言語との関わりにおいて考察を行った。

彼は、言語を表象の1つとして捉え、発達途上の人間が自己の経験をどのように表象していくのか、その経験を将来に向けてどのように体制化していくのか、これらを主要なテーマとして論究した。表象様式は、動作的 (enactive)、映像的 (iconic)、象徴的 (symbolic) 表象の3段階であった。動作的表象とは、行為の習慣として保存され、習慣的動作を通して知識を獲得する在り方を示し、映像的表象は、動作から解放されたイメージによる知識の保存であった。そして動作やイメージを言語に翻訳し、解説する表象として象徴的表象を位置づけた³。加えてその作用として以下のように指摘した。

象徴的活動は人間の種に特有な、原初的または原象徴的なシステムから生まれてくる。このシステムは分化し、特殊化して人間の生活の諸領域、すなわち、言語、道具の使用、時間を超えて体制下され習熟化されるもろもろの系列的行動、経験それ自身の体制化など、いろいろの領域にあらわれてくる。…子どもが言語を思考の道具として用いるためには、彼はまず経験の世界を、構文という構造原理とある程度同一の形態をもった体制化の原理の統制下におかなければならない。経験を象徴的に表象するための特別な訓練を受けなかったならば、たとえいかなる言語を話していようとも、子どもは世界を表象し、体制下する際には、主として動作的もしくは映像的な表現様式に依存したまま成人になってしまうのである⁴。

彼は、認識や認知において主導的な役割を担う順序に即し、表象の発達を段階的 (動作的表象→映像的表象→象徴的表象) に捉えた。とりわけ象徴的表象としての言語は、経験を体制化する文化的ツールとして認識し、極めて早く成熟水準に到達することを示唆した。加えて学校教育で学ばれる脱文脈的な読み書き能力や

文化一歴史的な道具としての言語は、思考の発達や形成、経験的意味の保存に重要な役割を担うのであった。

ブルーナーの言語観は、思考に影響を及ぼし、また思考そのものを形成するという思考の道具、媒介としての在り方を追究する機能主義に立脚するものであった。したがって、その問題関心は、はじめは限られた目的のためにしか言語が使えなかった子どもが、どのようにして効果的で生産的な言語の使用を可能にするかであった⁵。具体的には言語の理論的問題として、言語ゲーム (language game)、指示 (reference)、要請 (request) の成長を扱い、各研究を繋ぐものとして、外部と内部の関わりを指摘した⁶。

外部的作用としては、言語コミュニティにおける発話との出会いや調整を基に、それを援助するシステム、大人と子どもの対話を可能にするパターンとしてフォーマット (format) を挙げた。内部的作用としては、相互干渉を重ねるにつれて、どの程度までコミュニケーションの意図が、有力な言語的手順に変えられていくかという発達過程を挙げた⁷。この二つの作用が、乳児・幼児の話し言葉に関する研究の中核をなし、言語を習熟するときの援助と発達の在り方として論じられた。そしてブルーナーは、幼児の言語獲得を成し遂げる3つの意味を指摘した。

1つは適格性 (well-formedness)、つまり子どもが文法規則に沿って、発話 (utterance) できるということに関係する。この複雑な内容を含む問題を子どもはいかに学習するのか。幼児の文法規則は、周囲の大人が使うものと同じではないため、模倣による説明では不十分である。文法の獲得について、幼児たちがそれだけを学習することはありえない。言語の習得は常に現実世界で言葉を用いて何かをする、意味する、道具的であるように思える。そこで2つめの局面が提出される。それは、言語の指示機能と意味機能である。子どもはどのように指示と意味を学ぶのか、さらにどのようにして語彙—文法的発話 (lexico-grammatical speech) を通して、指示と意味を学ぶのか。そうしたことはまったく明らかではない。なぜならば、発話が行われる際の文脈と条件を含めて考えなければ、発話が何を指示し、意味しているかはわからないのである。ゆえに、子どもが言語を獲得するというときは、獲得されるもののさらに別な局面を考慮しなければならない。それは機能、またはコミュニケーションの意図、ないしどのように「物事をことばで進めるか」ということである。その場合、言語獲得における進歩の判断基準は、適格性や意味と指示といったものではなく、効

果性 (effectiveness) とも言うべきものである⁸。

以上の言語に関する3つの局面は、統語法 (syntax)、意味論 (semantics)、語用論 (pragmatics)、として要約され、子どもがネイティブスピーカーとなるうえで習熟すべき能力として強調した⁹。そして、コミュニケーションを使用した物事の要請、指示、指摘、対人コミュニケーションとして愛想、約束、手助け、などの言語的能力をどのように獲得するのか、あるいは言語機能の達成にはどのような機能が働いているのか、それらの疑問についてブルーナーは検討した。

2. ブルーナーにおける言語獲得の構造

ブルーナーは、ヴィゴツキー (Lev Vygotsky) の発達観に言語獲得の問題を解くコンセプトを見出した。ヴィゴツキーは、発達を社会や文化の内面化によって生じるものとして捉え、「発達の最近接領域¹⁰」(The Zone of Proximal Development, 以後 ZPD) に示される他者との相互作用を重視した。ブルーナーは、ヴィゴツキーによる着想を、発達における教育の重要性を強調するものとして捉え、発達概念自体が教育の理論であると指摘した¹¹。そして、ZPD における他者との相互作用を「足場かけ」(scaffolding) として一般化し提案した。「足場かけ」は、ZPD にある「成熟しつつある発達段階」を他者との協力において達成させる要因として捉え、意識的にできるようになった高次の能力や技能を引き継ぐ「意識の貸与」としての意味をもっていた。

ブルーナーは、「足場かけ」を言語能力の獲得および貸与においても適用させた。それは母子間コミュニケーションの成立過程において見出され、言語機能の発生と成長における言語獲得との相互関係に活用された。彼は、言語能力が相互に独立した形で子どもたちに学習されるものとして考えてはおらず、論理的に考えても不可能であると捉え、発達や環境との相互作用において達成し、経験や教育の仕方により言語獲得が早められることを示唆するのであった¹²。その手がかりとして彼は、フォーマット (format) を挙げた。

フォーマットは言語獲得において、実生活の場面で見られるような相互依存的に学習されるものとして提案され、「言語獲得というものは、子どもが最初の語彙一文法的な言葉を発する前に『始まる』のである。それは母親と子どもがお互いのやりとりを察知できるようなフォーマット (format) を創り、それでコミュニケーションを行い、かつ共有の現実を構成していく

小宇宙 (microcosm) として、役立ち得るようになったときに始まるのである¹³」と強調した。フォーマットの効用としてブルーナーは、チョムスキー (Noam Chomsky) の提案した言語獲得の仮説を支持した。チョムスキーは、通常の間人は一定の言語環境で言語を入力することで、能力を取り入れ、誰でも言語を使いこなせるようになることから、人間には生まれつき言語を獲得するシステムが備わっていると仮定した。そして、チョムスキーは言語構造の獲得において、普遍的文法、ないし人類が生得的に学習しなくてももっている、言語的深層構造 (linguistic deep structure) を基盤とする言語学習の能力の素地を成す、言語獲得装置 (Language Acquisition Device, 以後 LAD) を提案した。(チョムスキー, 1965)

ブルーナーは、チョムスキーの LAD に対して、従来の言語理論である連合-模倣-強化という教条から解放し、規則学習の問題に注意を向けさせたことを評価した¹⁴。その一方で彼は、チョムスキーの LAD を支える機能としてフォーマットを主張した。言語の発達や獲得は、その前提として、親、仲間、他者との交渉が不可欠であり、相互のコミュニケーション活動において効果が発揮される。したがって彼は、たとえ LAD があつたとしても、それへの入力、話し言葉が自然発生的に降り注ぐようなものではなく、大人の言語獲得援助システムによって形成される相互活動的な事象として他者とのコミュニケーションを重視した¹⁵。このようにブルーナーは、幼児が言語獲得システムへの援助としてフォーマットに参加する他者との相互干渉がなければ、LAD における言語装置は作動し得ないと主張するのであった。そしてブルーナーは、チョムスキーの言語獲得装置が作動するための要因として、フォーマットによる大人の制御を活用した言語獲得援助システム (Language Acquisition Support System, 以後 LASS) を提唱した。

3. LASS におけるフォーマットの機能

ブルーナーは LASS の機能を、前言語的なコミュニケーションから言語的コミュニケーションへの移行を確実にする道筋として提案した。彼は、はじめに子どもは限られた情報処理能力しかもっていないため、前言語的なコミュニケーションから言語的なコミュニケーションの発達の連続において、「調整された」入力としての大人の発話の必要を強調した¹⁶。同時に、この「調整」において、ルーティン化したなじみ深い道具としてフォーマットが、初期の発話の相互作用において必要であることを指摘し¹⁷、LASS を構成する

実際の手段と事柄として以下の4点を示した。

①子どもは、なじみ深い慣例的な相互干渉のフォーマットに集中するので、大人のパートナーは、すでに子どもの注意をひいていて、しかも基本的で単純な文法形態をとる特徴を強調できる。…これは母子とのフォーマットに非常によくみられる特徴である。

②フォーマット化によって大人が子どもを援助する今ひとつの手法は、いろいろなコミュニケーション機能を効果的に果たすためになじみ深い動作的、音声的手段に取って替わる語彙的、成句的なものを大人が助長し、モデルとして与えることによるものである。これは要請型 (request mode) を子どもが獲得していくときの眼目である。…ここで印象的なのは、いかに幼いときから、子どもは自分の注意の焦点と助力の要請とを送信するということである。…子どもは、語彙一文法的発話の形式的要素を獲得する前にすでに、自分の意図を「非自然的」ないし慣例化した形で、送信する際に要点をはっきり汲み取っている。コミュニケーションをまず機能的に枠づけることが、言語それ自体への道のスタートである。

③遊びフォーマット、とくに約束事のある、または構成的な「出来事」からつくられるものである。それらの出来事は、言語によって創られ、言語的な要求によって改造されていく。そしてのちにフォーマットは、「ふりをする」という場面の性格を帯びる。それは言語学習と言語使用の機会の潤沢な源である。

④母親と子どもとの間でいったんフォーマットが慣例化されるならば、さまざまな心理学的、言語的な過程が遊びの中にもたらされ、ひとつのフォーマットから別なフォーマットへと一般化していく。たとえば命名行動 (naming) は、まず指示的フォーマットに現れ、続いて要請的フォーマットに転移していく。事実、概念的な差異への言語的な対応を見出し、この意図が、ひとつのフォーマットから別なフォーマットへと一般化されていく。分節化 (segmentation)、交換可能な役割 (interchangeable role)、置換的手段 (substitutive means)、といった「抽象的」な概念もまた、動作、言語の両面で進行する¹⁸。

では、実際にどのような場面でフォーマットを媒介とした LASS が機能しているのだろうか。ブルーナーは LASS がみられる具体的な場面として、言語を用いたゲームをあげた¹⁹。

4. 言語ゲームにおけるフォーマット

言語ゲームの効用としては、まず子どもが大人との間で言語を系統的に使用する最初の機会としてゲームが用いられること、言語を用いて物事を成し遂げる方法を探る最初の機会としてゲームが用いられることなどを指摘した²⁰。彼がゲームとしてあげたのが、言語の使用と交換によって行われるイナイナイバー (peek-a-boo) であった。ブルーナーは、イナイナイバーにおける、その効果を以下のように指摘した。

たとえば「バー」という音声を伴ってスクリーンの後ろから顔が再び出現するということは、イナイナイバーというゲームの「生活形式」以外では、何らの機能的意味も持たない。この意味において、ゲームは実質上統語論的である。つまり、その目的は十分に形成されているのである。さらに、ゲームは完全に慣習的であり、「非自然的」である。イナイナイバーが、物の永続性に関する子どもの不確かさに基づいて行われるにしても、それは完成された人為的構成要素からなり、一連のほとんど融通性のないルールによって結び付けられている。そして、もちろん、ゲームは一定の順序に系列化され、さらにはルールに従って変形されもする一連のそれを構成する行為 (constituent acts) から成っている。その上、ゲームのフォーマットは「深層構造」 (deep structure) とゲームの表層を取り扱う一連の具現化のための規則とを持つものと見なせるだろう。イナイナイバーの深層構造は、物や人との消失と再現によって制御されている。ちなみに、その表層構造はスクリーンや布あるいは他の物を使ったり、消失と再現との間の時間や動作を変えたり、構成上の発話を変えたり、誰があるいは何が消失するかを変化させることなどによって、作り上げられる。実際、理想化されることにより、フォーマットはほとんど「言語のようなもの」 (language-like) になる²¹。

ブルーナーは、イナイナイバーをフォーマットの達成としてだけでなく、「イナイナイ」と「バー」による「やりとり」 (turn-taking) において、隠す者と隠されるもの、行為者と経験者の役割によるゲームごとの交換を可能にすると強調した。さらに、ゲームの中のあらゆる行為や発話の「意味」 (meaning)、あるいは信号的価値など、ゲームを原会話 (protoconversation) としても重視した²²。

彼はイナイナイバーなどの言語ゲームを、フォーマットの典型として、言語の交換、言語による意味づ

け、ルールの理解、楽しさを通した言語獲得などを可能にする有効な言語獲得方法として位置づけた²³。ゲームを通じて行われる言語獲得は、LASSが機能する理想的な形であると同時に、前言語コミュニケーションから言語的コミュニケーションへと導く思考の発達や形成に重要な役割を果たすものであった。これらの言語獲得行為をふまえると、ゲームの中での意図や意味を共有することなど、使用することによって学習されるという、ブルーナーのプラグマティックな言語観を見出すことが出来る。

4. 読み聞かせにおけるフォーマット

次に大人との相互作用における言語獲得として、母子間に散見される絵本の読み聞かせについて検討する。ブルーナーはニンニオ(Ninio & Bruner, 1978)等との研究において絵本を介した母子のやりとりを分析した。次の例は、11カ月児によるやりとりである。

母親:「ほら、見てごらん」(注意を喚起する呼びかけ)
子ども:絵に触れる
母親:「これは何?」(質問)
子ども:(喃語を発声し、微笑む)
母親:「そう、ウサギさんね」(フィードバックと命名)
子ども:(発声し、微笑み、母親を見上げる)
母親:(笑顔) そう、ウサギよ (フィードバックと命名)
子ども:(発声し、微笑み)
母親:そうよ (笑顔) (フィードバック)²⁴

ブルーナーは、絵本の読み聞かせにおける母親の発話の形として主に4つ(注意喚起、質問、命名、フィードバック)の基本的パターンを提案した²⁵。そして、この発話パターンを繰り返すことにより、子どもの非言語的な反応にフォーマットが組み込まれ、母親は、子どもの表情、身ぶり、手ぶり、発声などを注意深く観察し、反応に対して相互コミュニケーションを調節しながら達成する。彼はこうした支援のやりとりに足場を見出し、以下のように強調した。

それはなんと際立って安定した手順であったことか。その過程の各段階で、その子のすでに発達させていた言語能力がどんなものであろうとも一指示によって手がかりをつかむ、事物や事象を「表す」音声を理解する、等々、母親はその言語能力を受け入れた。…その結果、彼女は子どもの足場—子どもの注意を喚起し、質問を発し、もし子どもが名称を知らなければ答えを教え、子どもの答えは何であ

れそれを確認する—であった。子どもが言語能力を獲得するに従って、彼女は基準を上げるのだった。はじめは、子どもが発するどんな発声も、たいいてい受け入れられる。しかし、子どもが標準的な形式に近づくたびに、彼女はあくまでその形式を要求する。もちろん変化していたのは、反応に対する母親の期待であって—しかも、もちろんそれは、子どもの能力に関する彼女の「理論」によって「微調整され」ていた。子どもが喃語から「名称」を短く発生する状態(まだ全く標準的ではないが)に移ったとき、彼女はもはや喃語を受け入れず、その短い「名前」を強要するのであった²⁶。

ブルーナーは、母子間における言語獲得を研究する過程で、フォーマットへのアプローチと同時に、文化への参入という側面を見出した。それは、フォーマットを足場としてだけではなく、言語の習熟に応じて、言語それ自体がフォーマットを構成すること、すなわち言語獲得において言語的慣習を学習することで、子ども自らがフォーマットを構成し、その場に応じて適応することが出来るようになることを示唆するのであった。同時にフォーマットは、足場機能だけでなく、足場を抜く機能としても提案され、彼はフォーマット形成、微調整された反応、行為や相互作用の中へ言語を埋め込む様式、これらが言語獲得援助システムを構成しており、そのシステムがチョムスキーのLADの作動を可能にしていると最終的に結論を下すのであった²⁷。

おわりに

本論文では、ブルーナーにおける幼児の言語獲得に関して、その構造や意義について明らかにしてきた。ブルーナーの言語獲得の骨格は、チョムスキーによるLADを基に、前言語的コミュニケーションから、言語的コミュニケーションへの連続において、フォーマットを通して指示や要請を達成し、言語を獲得していく過程を重視した。そして言語ゲームや母子間の読み聞かせにおいて言語を含めた「文化」を、いかに獲得させるかという文化との関わりにおいても指摘された。その基本的なコンセプトは、言語と文化の獲得を基礎として、子どもと母親の相互関係がいかに大切であるかをプラグマティックな現実論として強調した。言い換えると、乳幼児が育つ過程で、大人との対応関係がいかに生育上重要なものであるか、人間の子どもは、人間が相対する中で人間的になるということも実証するのであった。

またブルーナーは、実生活の場面で見られる相互依存的環境で学習される基礎として、幼児の間主観性 (intersubjectivity) を強調した。ブルーナーにおける間主観性は、言語それ自体が現れる以前に存在するものとして捉え、「他者への関心をもつ傾性」あるいは「他者の心」が自分の心のように扱われる原初的なものとして位置づけていた²⁸。幼児が言語獲得を達成する前段階として間主観性を身につけていることが、後のアタッチメントや自発的行動を支えるコンピテンスの基盤として発揮されることを彼は確信していた。それは、『教育としての文化』(The Culture of Education, 1996)で「心理学の来たるべき章」において述べられたように、単に言語獲得に留まるのではなく、「共同体の中に生きる、文化化した人間存在の特徴²⁹」として捉え、母子間の相互交渉を支えるものとして強調するのであった。

これらをふまえると、乳幼児期が言語学的に大きな意味をもつというだけでなく、いかに人間的成長において重要な段階であるかが理解できる。そして、幼児の言語獲得を達成させる大人の役割は、子どもが自分で言語を発達できるように、子どもの環境を整えると同時に、大人自身が言語獲得の教材として振る舞うことが求められるのである。したがって、ブルーナーは、他者との相互作用や母子関係による影響を、フォーマットとして構造化し、乳幼児の発達における基礎基本として提案するのであった。

しかし、ブルーナーは、言語獲得の構造を考察することが中心的課題ではないと述べている。「私たちにあって、生来の“言語的”な才能がどんなもので構成されていようと、それが多かれ少なかれ構わない。なぜならば、人間が語彙一文法的 (lexico-grammatical) な言語のための生得的な能力を軽装備でも重装備でも、所詮言語の“使用”方法を学んでいなければ成らない。それは実験などによる“試験管内”(in vitro) で学ばれるものではない。言語が使用される唯一の方法はコミュニケーションの中で“用いる”場合だけである³⁰」。このような言語獲得に対するプラグマティックな理念は、三歳児神話にある伝統的な養育観を反映すると同時に、より現実的に、科学的に分析し、乳幼児の可能性を指摘することにブルーナーの教育観を見出すことが出来るのである。

参考文献

- Chomsky, Noam.(1965) Aspects of the Theory of Syntax. Cambridge, MA:MIT Press,
 小林 春美・佐々木 正人 (1997) 『子どもたちの言語

獲得』大修館書店

- 小山正 (2008) 『言語獲得期の発達』 ナカニシヤ出版
 中島誠・岡本夏木・村井潤一 (1999) 『ことばと認知の発達』 東京大学出版会
 Ninio A., & Bruner, J.S.(1978) The achievement and antecedents of labeling. *Journal of Child Language*, 5, 1-15.

注

- 岡本夏木 「幼児教育を学ぶ—幼児と教育のかかわり—」 岡本夏木・河崎喜矩子 (1994) 『幼児教育を学ぶ人のために』 世界思想社 6頁
- 同上 7頁
- Bruner, J., [et al.].(1966) Studies in cognitive growth : a collaboration at the Center for Cognitive Studies New York : J. Wiley & Sons, pp.20-21 J.S. ブルーナー [他] 著; 岡本夏木 [ほか] 訳 (1968) 『認識能力の成長: 認識研究センターの協同研究』(上) 明治図書出版 23-24 頁
- Ibid. pp.75-77 同上 85-86 頁
- Bruner, J.(1983), Child's Talk : Learning to use Language, W・W・Norton&Company ・New York ・London, p.1 J.S. ブルーナー著; 寺田晃, 本郷一夫訳 (1988) 『乳幼児の話しことば コミュニケーションの学習』新曜社 i頁
- Ibid. pp.4-6. 同上 v-vii 頁
- Ibid. p.8. 同上 vii 頁
- Ibid. pp.15-17 同上 3-5 頁
- Ibid. pp.18 同上 5 頁
- 「発達の最近接領域」は、子どもの現在の発達段階と未来の発達段階の狭間を指し、子どもが自分で解決できる段階を認識し、他者との協同によって問題解決の可能な段階に背伸びさせるコンセプトである。
- Jerome Bruner (1962) Introduction in Thought and Language by L.S. Vygotsky Edited and translated by Eugenia Hanfmann and Gertrude Vakar THE MASSACHUSETTS INSTITUTE OF TECHNOLOGY vi
- Ibid. Bruner, J.(1983) pp.17-20 前掲 『乳幼児の話しことば コミュニケーションの学習』 3-6 頁
- Ibid. Bruner, J.(1983) p.20 同上 5-6 頁
- Ibid. p.26 同上 24 頁
- Ibid. p.39 同上 32-33 頁
- Ibid. p.39 同上 33 頁

- 17 Ibid. pp.39-41 同上 32-33 頁
- 18 Ibid. pp.40-42 同上 34-37 頁
- 19 (乳幼児の話し言葉 41-45)
- 20 Ibid. pp.46-47 同上 42-43 頁
- 21 Ibid. pp.48-49 同上 43 頁
- 22 Ibid. p.49 同上 43 頁
- 23 Ibid. pp.49 同上 43-44 頁
- 24 Ibid. pp.77-78 同上 84-85 頁
- 25 Ibid. pp.77-78 同上 84-85 頁
- 26 Bruner, J., (1983) In search of mind : essays in autobiography. New York : Harper & Row, pp.171-172
ブルーナー著 ; 田中一彦訳 (1993) 『心を探して :
ブルーナー自伝』みすず書房 278 頁
- 27 Ibid. p.173 同上 281 頁
- 28 Ibid. Bruner, J.(1983) p.120 同上 148 頁
- 29 Bruner, J., (1996) The Culture of Education. Cambridge,
Mass. : Harvard University Press, pp.173-174 ブルー
ナー著 ; 岡本夏木, 池上貴美子, 岡村佳子訳 (2004)
『教育という文化』岩波書店 239 頁
- 30 Ibid. Bruner, J.(1983) p.117 同上 143 頁